

# 寓話「結婚物語」

エッセー

## 登場人物

---

男

女

男の父

女の母

町長

商人

僧侶

教師

踊り子

娘の母

## 01 駆け落ちする男と女

---

一筋の川が、山から流れ、田んぼを横切り、海へと続いていました。

多くの村人が、村と海の間には町があると信じていました。しかし、川を下ったものはあっても、上って帰ったものはいません。村の誰も、町を見たことがありませんでした。

村では、田んぼと山辺に別れて暮らしていました。家ごとに家業を持ち、子は親の仕事を継ぎました。仕事を変える方法は、結婚しかありませんでした。

しかし、田んぼから山辺、山辺から田んぼに移り住むものはありませんでした。そのため、田んぼと山辺では、全く違う習慣を持つようになりました。

---

ところがある年、結婚相手が見つからない若者は、田んぼで暮らす男と山辺で暮らす女、二人だけになってしまいました。

男の家業は、米作りでした。稲を守り育てることがすべてでした。着るものもかまわず、田んぼと空模様を気にかけて暮らしていました。

女の家業は、装身具作りでした。晴れの日に備えることがすべてでした。磨きあげた装身具にふさわしい姿を保つためには、食べることも犠牲にしました。

実利を重んじる男の家と、様式を重んじる女の家は、代々仲が悪く、憎み合っていました。違う価値観を持つ相手の家をののしり、居合わせることも嫌がりました。

しかし、男は女を見て、自分にはない美しさ、優しさを好ましく思い、好きになりました。女もまた、自分にはない力強さ、頼もしさを好ましく感じていました。

男は、山辺に使いに行くたび、女の姿を探し求めました。女を見つけると、女が気づくまで、飽きもせずに眺めていました。

女は、男の視線に気づくと、恥ずかしくなって逃げ出しました。そのため、男と女は、話すどころか、視線を合わすこともないまま、稲だけが伸びていきました。

---

ある秋の朝、黄金色に変わった田んぼは、稲刈りで賑わっていました。山辺では、稲刈りあとの祝いの準備で賑わっていました。

女は、流れの激しい山辺の川原で、石を探しておりました。すると、男が使いにやってきました。

男は、女に気づかれぬように、川原に降りました。そして、女を真似て石を探しました。

女は驚き、逃げようとしてしました。すると男は、丸くすべすべした黒い石を女に見せました。石を見た女は、男から石を取り上げ楽しげに笑いました。そして男に、女が集めた半透明の白い石を見せました。

「探しているのはこういう石よ。磨くと透明になるの」

「俺に、磨いて見せてくれないか」

「ここでは無理。道具がいるの。たとえ道具があっても、わたしはまだ上手に磨けない。だから集めることが仕事なの。家業は、わたしには向いてないみたい」

「俺も同じさ。父親の言いなりに動くだけで、自分では何一つ決められない。今日だって、俺だけ稲刈りから外された」

「わたしは、わたしが望んでここにいるの。集めることしかできないから。でもね、この石を磨くと本当にきれいなものよ。今度見せてあげる。太陽の光を集めて輝くの」

「見たいな。いつ会える？」

「わたしはここから離れられない」

「俺が来るよ。仕事を早く終わらせて、日が暮れる前に会いに来る」

男が去った後、女は男が見つけた黒い石を大切にしまいました。

---

翌日、仕事を済ませた男は、日暮れ前に女に会いに行きました。

女は、男を見つけると透明な玉が連なる腕輪を差し出しました。男は、腕輪を受け取り、夕日にかざしました。すると玉から七色の帯が現れました。

「お母さまからいただいた腕輪よ。わたしのお母さまは、本当に石を磨くことが上手なの。きれいでしょ？」

「腕輪もきれいだけど、これをつけたあなたはもっときれいだろうな」

女は男の言葉に驚き、戸惑いました。見入られたように見返し、女は男の言葉を待ちました。

「俺につけて見せてくれないか？」

女は、腕輪を受け取り左腕につけました。腕輪は、川面のきらめきを映して輝きました。

男は、女の左腕をつかみました。

「もすぐ日が落ちる。帰らなければ」

「明日も必ず来るから」

女は、男に背を向け、山の中に帰っていきました。男は、女の姿が見えなくなるまで見送りました。

---

翌日の夕方、男は女に会いに行きました。その次の日も、その次の次の日も、会いに行きました。

二人の仲は、すぐに噂になりました。どちらが家業を変えるのか、人々は口々に言い合いました。ある男は、美しさなどというあやふやなものは、生まれた時から触れねば分からぬと言いました。ある女は、力仕事こそ子どものうちから鍛えねば無理だろうと言いました。そして結局は、家業さえ身につかぬまま、他の家でなどやっていけるはずがないと言い出すのです。

噂は、男の父の耳にも届きました。男の父は、言い返せぬ悔しさに、山辺の人々がますます憎くなりました。

男の父は、男を呼びつけ、座れと命じました。男は黙って父に従いました。父に何を問われるか、男には分かっていました。

「うちの家業はなんだ。言ってみろ」

「はい、お父さん。米作りです」

「そうだ。誰からも喜ばれる仕事だ。着物を汚した分、尊敬される」

「俺も家業を誇りに思っています。しかし、美しく身を飾る人たちも好きです」

「お前は分かっていない。身を汚しながら、身を飾るなどできるはずがない。着飾る嫁など要らぬ」

「俺は嫁にもらうとは言っていません」

「では、お前が婿に行くのか」

「やっと話せるようになったばかりです。結婚など、まだ考えられません」

「話すだけでは終われまい。嫁にもらうなり、婿に行くなり、決めねばならぬ」

「結婚の約束がなければ、会って話してはいけないのですか」

「共に生きられぬ相手のことなど、知って何になる」

「しかし、お互いを知らなければ、結婚など決められません」

「どうやって知るのだ。付き合い続けて、合わぬと分かれば捨てるのか」

「捨てたりなどしません」

「では、今決めよ」

「今夜、会って話してみます」

「わたしが聞いているのは、お前の希望だ。女の希望ではない」

男は、嫁にもらうことも、婿に行くことも望んでいませんでした。しかし、他にどんな方法があるのか分かりませんでした。

「息子よ。お前は自分の将来を語れなかった。問われて、嫁にもらうと言えなかった。以後、女と二人で会うことは許さん。もし、再び噂が立てば、お前をこの家から追い出す。女と会うなら、婿に行く覚悟で会え」

男の父は、男を残して、田んぼに戻ってしまいました。男は、どうすればよいのか分かりませんでした。

---

男が男の父に問い詰められていたころ、女も女の母に問われていました。

女は、川原で石を探していました。すると女の母が近づいてきました。女の母は、女の隣に座り、一緒に石を探し始めました。

「石探しには慣れたかい？」

「はい、お母さま。すっかり慣れて、すいぶん早く見つけられるようになりました」

「お前は家業が好きかい？」

「不器用で、年ごろになっても材料集めしかできぬわたしですが、家業は好きです」

「では、嫁に行かずに、婿を取るといい。器用で優しい婿を見つけるといい。お前、心当たりはないのかい？」

「いいえ、お母さま。でも、お慕いしている方ならございます」

「日々の暮らしは、手を止めれば途端に立ち行かなくなる。肝心なのは続けることさ。いくらお前が好いた男でも、我が家の暮らしに染まれぬようでは、婿にはもらえない。その男は、お前のために家業を変える気があるのかい？」

「分かりません。でも、あの人は石探しを手伝ってくださいました」

「お前はわたしに話さなかったね。男と出会ったことも、そのあと続けて会ったことも、わたしに言わなかった。お前たちは秘密のつもりだろうが、隠せるものじゃない。お前の父も知っている。わたしだけが知らなかった。わたしは噂ではなく、お前の口から聞いたかった」

「特別なことは何もありません。ただ話をしただけです」

「年ごろの男と女が、話すだけで終われるものか。嫁にいくなり、婿を取るなり、決めなくては

続かない。誰とでも好きに話せるのは子どもの間だけさ」

「わたしはまだ子どもです」

「いいや、恋をして変わった」

「いいえ、わたしはお母さまの娘です」

「わたしの娘は、日が暮れる前に家に帰って来たよ。腹を減らして駆けてきた」

女は、知らぬ間に暮らしが変わっていたことに気づき、驚いた。元の暮らしを思い出せぬことに戸惑った。

「男と別れば、お前はまだ子どものままでいられる。急ぐことはない。男と別れて、わたしの娘に戻りなさい」

「結ばれぬことが運命なら、別れてもかまいません。だけど運命に引き裂かれるまでは、あの人に会わせてください」

「分からないのかい。わたしに知られたことが運命さ。引き裂かれる時が来た」

「いいえ、お母さまが運命なら変えられる。きっとわたしの願いを分かってくださる」

「わたしが許してもどうにもならない。結婚には選択が求められる。わたしも相手を選んだ。お前も選ばなければならない」

「でももし、あの人がわたしを選んでくれなかったなら」

「いずれ別れるものなら、付き合い続けても仕方がない。別れるなら早い方がいい。今度会ったら婿の話をしなさい。お前が言えないなら、わたしが言ってもいい」

「聞くしかないのですか」

「聞くしかない。避けては通れない」

「あの人は夕方、きっとわたしに会いに来てくださいます。わたしはここで待ちます。お母さまは家で待っていてください」

「お前の将来だ、お前に任せよう。わたしは家で待っている。だから、どんな結果になっても、必ずわたしのところへ帰っておいで」

女の母は、女を残して帰っていきました。

---

それから女は、ひとりで石を探しました。けれど、探し求める石は、探しても、探しても、見つかりませんでした。

日は沈み、辺りは闇に包まれました。しかし男はまだ姿を現しません。

やがて一面、黒一色に染まりました。とうとう男は現れませんでした。

女は、流れ続ける川に近づきました。すると女の背後で、黒い影が二つ揺れました。

川はしぶきをあげて、激しく流れ下っています。不意に、女が川に片足を入れました。すると影の一つが動き、女の腕をつかみました。振りかえった女の目に、男が映りました。

男は、女を抱き寄せ、山を下りました。もう一つの黒い影も、後を追って動きました。

「遅れて悪かった。俺と一緒に町へ行こう。村を出て欲しい」

「あなたさえよければ、わたしの家に婿に来てください。母も喜びます」

「俺はもう、親に仕える暮らしは嫌だ。どうか来てほしい」

「村を出ることなら、これまで何度も考えました。でも町にも居場所はないかもしれない。わたしはもう、何もかも嫌になってしまいました。もうわたしに構わないでください。気まぐれで振り回さないでください」

「気まぐれではない。でも、声を掛けることができなかった。いったい何を言えばいい。俺にも、俺の望みが分からぬというのに。せめてあなたが家に帰るまで見ていたかった。だけどあなたは家に帰らなかった。どうしてあなたを置いていけるだろう。俺もあなたも、この村では一人ぼっち。あなたの辛さは、俺が一番知っている」

「男のあなたに分かるはずない。あなたは、まだこの村で結婚相手を見つけられる。でもわたしは、誰かが死なない限り、無理でしょう。死んだって、若い娘が嫁ぐかもしれない。あなただってよく分かっているはず」

「そういう意味じゃない。違うんだ。どう言えば分かってもらえる？」

男は、立ち止まり女を見た。

「あなたの姿が見えなくなるのが嫌なんだ。離れて暮らすことはできない。どうか村を捨て、俺と来てほしい」

男は、女の返事を待った。

「どうしてわたしなの？ わたしでいいの？」

「俺はあなたと生きたい」

男と女は、手を取り合った。そして、まだ見ぬ町を目指して、歩き出した。するともう一つの黒い影が姿を現しました。女の母でした。

女の母は、声を殺し、二人を見送りました。姿が見えなくなっても、いつまでも、いつまでも動きませんでした。



## 02再び問われる男と女

---

山を下りた男と女は、人目を避け、暗い田んぼを抜けて、村の出口にたどり着きました。

男は、女に言いました。

「村から行くものも、町から来るものも絶えた今、川下の道は草の中に消えた。けれど、川は残っている。川さえ見失わなければ、山を抜け、町へ出られる」

「わたしは山辺の生まれです。見知らぬ山とはいえ、山歩きは慣れております。わたしが先に参りましょう」

「いや、俺が先を歩く。一人で抜けるはずだった山道も、あなたと一緒に心強い。連れ出した俺が、必ず町まで連れていく」

男が山に入り、女が続きました。山は、思いのほか草深く、木々が茂っていました。男の腕には無数の切り傷ができました。

女は、大振りの枝を拾い、男に渡しました。男は、どうしていいのか分からず、立ち尽くしました。女は、枝を振って草を払い、道を作ってみせました。

男は、枝を受け取り、今度こそ下り始めました。女も男の後に続きました。

---

山は、進むほど傾きが鋭く、川音が勇ましく響きました。

男と女は、黙々と歩き続けました。しかし、どれだけ歩いても、木々はどこまでも続き、先を見渡すことはできませんでした。ただ、緩やかに変わった川の流れだけが、歩き進んだことを知らせてくれました。

歩き疲れた男と女は、川原に下りて水を飲みました。水は冷たく、ほのかに甘く花の香りがしました。落ち着きを取り戻した女は、これから先のことを問いました。

「真夜中を過ぎれば、月がわたしたちを照らしてくれるでしょう。この暗さでは、あなたの姿さえ見えません。月が出るまで、ここで待った方がよいかもしれません」

「高い場所に登れば、もう少し見渡せるかもしれない。俺が行って見てこよう」

「いいえ、川を離れて迷えば、二度と戻れません。わたしとここにいてください」

「では、川を下って様子を見てこよう。あなたはここで休んでいてください」

「いいえ、あなたが行かれるなら、わたしも一緒に参ります。残るのは嫌です」

「この先、どこまで歩くか分かりません。月が出るまで、あなたは休んだ方がいい」

「わたしはまだ歩けます。どうかこのまま連れて行ってください」

「あなたがそう言うなら、一緒に行きましょう。休みながら、ゆっくり進むことにしましょう」

男は女の手を取り、静かに歩き出した。秋の夜風は冷たく、疲れ切った男と女の体から熱を奪っていった。二人は体を寄せ合い、闇の中、終わりの見えない山道を歩き続けた。

男が止まり、女が待つ。女が止まり、男が待つ。二人の歩みは、次第に途切れがちになり、とうとう立ち止まってしまった。

足音が止み、静まり返った山の中に、風が聞きなれぬ音を運んできた。音楽だった。

男と女は、再び歩き出した。音楽は、川を下るほど大きく、はっきり聞こえた。しばらく歩くと、笑い声さえ聞こえ始めた。すると木々の間に明かりが見えた。ついに男と女は山を抜けた。

---

町は、川の兩岸に広がっていた。しかし、家々の先に、海は見えなかった。暗闇だけが広がっていた。

男と女は、町を目指して歩き出した。夜を迎えた町は暗く、静かだった。ただ一軒、川上に建つ大きな家だけが、明かりを灯していた。音楽は、その家から流れていた。庭に近づくと、香ばしい匂いが漂ってきた。

男と女は、門から庭を見た。人々は踊り、飲み、食べては話し、大声で笑っていた。まるで嵐のようだった。神にささげる村の祭りとはまるで違っていった。

男と女は、圧倒され、門から庭に入ることができずにいた。すると、三人の老人が近寄ってきた。最初に、鋭い目をした老人が口を開いた。

「ようこそ、わたしがこの町を治める町長です。ばか騒ぎにさぞ驚かれたことでしょう。なに、いつもは静かな町なのです。今日は特別、わたしたち三つ子が百歳を迎えためでたい日なのです。どうぞ、許してください。そして、わたしたちのため、あなたがたも中に入って祝ってください。この町の素晴らしさを、あなたがたの町に伝えてください」

町長は、男の手をとり、かたく握りしめました。するとふくよかな老人が歩み出しました。

「兄さん、町を思うなら、まずは食べて飲んでもらうことですぞ。いきなり頼まれても、帰って何を話せばよいのやら。さあ、庭へお入りなさい。わたしが用意させた、珍しい品々を一度でも

味わったなら、他の物など砂も同じ。味わうことを願ってやまず、再び足を運ぶこと間違いなし。なんせわたしは、この町一番の商人なのですから」

商人は、男と女に微笑みかけました。するとやせ細った老人が歩み出しました。

「兄さんがた、こちらの用件ばかり言いたてては、おふたりが気の毒です。見たところ、ずいぶんお疲れのご様子。まるで山越えでもなさったかのよう。何か事情があるのではありませぬか。わたしは、僧侶をしております。どうか、安心してお話しなさい。あなたがたはどこから来たのですか？」

男と女は、顔を見合わせ、どうしたものかと思案した。しかし、何も知らぬ二人は、気のよさそうな三人の老人に力を借りるほか、どうすることもできなかった。男は、老三兄弟に言いました。

「俺たちは、川上の村から来ました」

すると町長が男に聞きました。

「川上へ続く道は失われている。どうやってここまできた。川上の村は、なにゆえあなたがたを使いによこした」

次に商人が身を乗り出して言いました。

「昔通りの暮らしなら、川上の村にはうまい米と磨かれた美しい石があるはず。もし売りに来たのなら、このわたしにきなさい。入り用なものがあるなら、なんでも手に入れてみせますぞ」

男は、駆け落ちしたと言えず、うつむいてしまった。異変を察して、僧侶が助け船を出した。

「どうやらお二人には話し辛い訳があるご様子。人に囲まれ、立ったままでは、出る言葉も引っ込んでしまう。部屋に入って伺いましょう。なに、案ずることはない。わたしたちについて参られよ」

男は、女を見た。女は男の腕をつかみ、首を横に振った。

「大丈夫、あの人たちを信じよう」

男と女は、庭に足を踏み入れた。

---

庭では、美しい踊り子が艶めかしく踊っていた。男は立ち止まり、踊り子を見た。すると踊り子は、肩を揺らし始めた。揺れはだんだん激しくなり、踊り子の体中に広がった。豊かな胸は波打ち、生き物のように跳ねた。

町の人々が踊り子を取り囲み、歓声をあげた。拍手が起こり、庭全体が波打った。

男は、吸い込まれるように踊り子の方に踏み出した。すると、女から手が外れた。男が振り返ると、女も踊り子を見ていた。女は、男の視線に気づくと笑い返し、踊り子に拍手を送った。男は、女を引き寄せ、老人の後を追った。女は、赤く染まった男の横顔を、不思議そうに眺めた。

男と女は、老三兄弟の家に足を踏み入れた。

---

玄関には、立派な船の置物が飾られていた。置物の隣には、若い男が立っていた。

「わたしは、商人のひ孫で、この町で教師をしております」

教師が女に手を差し出した。男は、教師と女の間割り込んだ。

「これは失礼。この町の習慣をご存じないようですね。あなたがたは兄妹ですか」

「俺たちは兄妹ではない」

「その若さでは、夫婦でもない。ならば、町の習慣に従い、主人側のわたしが、女性を案内する決まりです」

「俺たちの村にはそんな習慣はない」

「わたしの町にはある。そして、あなたがたがいるのは、わたしの町です。この町にいる間は、従っていただきます」

この町のことを何も知らぬ男は、教師の指示に逆らうことができなかった。女は、答えられぬ男の代わりに口を開きかけた。しかし、ただ息を吸い、堅く口を閉じ、従った。

---

教師の案内で、長い廊下を歩き、低い扉をくぐった。すると板張りの狭い部屋に出た。

女は、部屋の中を見回した。壁と天井には、細かい穴が無数に開いていた。老三兄弟は、すでに席に着いていた。

男と女が座ると、教師が外から扉を閉めた。外の音が聞こえなくなった。

女は、男の腕をつかみ、部屋から出ようとした。すると商人が女に言いました。

「心配いりません。ここは商談のための特別な部屋。外の音を遮り、中の音を漏らさぬ。わが家の自慢ですぞ」

続いて、僧侶が男に問いました。

「秘密が漏れぬとはいえ、嘘、偽りを述べれば助けることはできぬ。正直に答えられよ。あなたがたは、村の使いではないのでしょうか。わたしの見立てでは、村を捨て、この町へ逃げて来た。どうかな」

「何も聞かずに、どうか俺たちをこの町に置いてください。どんな仕事でもします」

すると町長が男に問いました。

「町長として答えよう。この町は、旅人と商人の町。入る時も、出る時も、届け出る必要はない。ただし、留まって暮らすとなれば別だ。仕事がある。あなたがたはこの町で何をするつもりなのだ」

「なんでも、言われた通りにします」

「あなたはわたしの言うことが分かっていない。この町では誰も命じない。何をするのか、あなたたちが決めるのだ」

町長は、男を睨みつけました。すると商人が身を乗り出して言いました。

「兄さん、仕事の話ならわたしの出番。口出しさせてもらいますよ。新しく仕事を始めるより、ここに来るまでしていたことを続けた方がずっとうまくいく。あなたがた二人は、村で何をなされていた」

「俺は親の仕事を手伝って、米を作っていました。荷物運びや伝言も俺の仕事でした」

「わたしも親の仕事を手伝って、川原で石を集めておりました」

「どちらも親の手伝いの半人前では、一人ですべての仕事をこなせまい。さて、困った。この町では自分のことは自分するのが習い。誰も人を雇わぬ。しかし、海まで下れば人を集めて使うものがある。そこへ行かれることですか」

「海までどれくらいかかるのでしょうか」

「わたしが持つ船で川を下れば、半日あまりで港町に着く。しかし、ただというわけにはいかない。船が出るのは先の話。それまでの宿代ももらわねばならぬ。二人合わせていくら持っておられる」

「俺たちは、身一つで村を出ました。何も持っておりません」

すると突然、商人が床を叩いて怒鳴りました。

「身を立てる技もなく、身を守る財もない。なぜ村を出た。話にならぬ」

言い終わると商人は、男と女に、背を向けてしまいました。代わって、町長が話しました。

「道が途絶えたとはいえ、川上の村とは親しく付き合ってきた。事情によっては、つき返さねばならぬ。なぜ出た。まさか罪を犯して逃げてきたわけではあるまいな」

「俺たちは罪など犯していない」

見かねた僧侶が、間に入りました。

「兄さんがた、ここはわたしに任せてください」

僧侶は、男に言いました。

「悪いことは言いません。村へ帰りなさい。わたしが送って差し上げます。謝って許してもらいましょう」

「村に帰れば、俺たちは仲を引き裂かれる。帰ることはできません」

「海は遠い。川を下って戻ったものはない。暮らしが厳しく、仕事に追われて、身動きがとれなくなる。よく考えられよ。今なら生まれ育った村に帰れる」

「教えてください。この町で身を立てるには、どうしたらいいのでしょうか？」

するとまた商人が床を叩いて怒鳴りました。

「お前はあほうか。言われた通りにすれば商売が続くと思うのか。次に何をすればいいのか、誰にも聞かずに分かるのか。分かるわけがない。いつでも他人が頼りだ。一度教えたが最後、聞き続けられる方がいい迷惑だ。第一、わたしはお前の父親ではない。ただで教えてなどやらぬ。教えるくらいならわたしがやる。やって儲ける」

続いて町長が男に言いました。

「弟が怒るのも無理はない。まったくあきれた若造だ。無知、無責任も甚だしい。大人しく親元にいればよいものを、なぜ女を巻き込んだ。なぜこの町を巻き込む」

すると、黙って聞いていた女が口を開きました。

「わたしは巻き込まれてなどいません。自分からついてきたのです。あなたがたは何も知らない。それなのに、一方的に責め立て酷い言いよう。この部屋に連れて来たのはそちらではありませんか。あなたがたこそ、町の事情にわたしたちを巻き込まないで。わたしのことで、この人を責めないで」

「町の代表であるわたしたちに、なんという言い草だ。わたしたちはお前のためを思って問うているのに」

「わたしは母から、自分より弱いものを責め立てるものは愚かだと教えられました」

「わたしを愚か者呼ばわりする気か。上等だ。我らに頼らずとも、暮らすあてはあるのだろうか」

「あります」

「ならば言え」

「あなたには教えません」

町長と女はにらみ合いました。男は、どうしていいのか分からず、女の横顔を見詰めました。見かねた商人が、女に言いました。

「理屈は通っている。頭のよい女だ。しかし、言い勝っても商売は続かぬ。立場が悪くなるだけだ。さあ、どうする？」

「あなたがたこそ、三人がかりで一人を責めて、恥ずかしくはないのですか。この人に何を言わせたいのですか」

女は、男を背に隠した。すると僧侶が、町長に語りかけた。

「確かに、問い続けても答えは出ない。しかし、どう暮らすかは決めねばならぬ。幸い、今夜は宴のため人が集まっている。町の人間と話せば、よい考えが見つかるかもしれない。庭に戻ってはどうかろう？」

「だめだ。この町でどうするのか返事を聞くまで、町の人間と会うことは村長として禁ずる」

「しかし兄さん、まずは町のことを知らなければ」

「いいや、何をするのか答えが先だ。答えがなければ紹介しようがない。女の尻に敷かれ、村を捨てた男とでも言うのか」

「では、町の人間に会わせず、二人をどうするつもりですか」

「案内した教師に話しておく。今夜は、学校に泊める。返事は、明日の朝聞く。村に戻るか、海へ去るか、決めよ」

続いて商人が男に言いました。

「小僧、女が大事なら村に戻れ。港町はここよりずっと自由だ。その分、弱いものに冷たい。今

のまま行けば、女が身を売る以外、暮らすすべはない。その女なら、お前のためにやりかねない。何があったか知らぬが、謝って許してもらえ。身を落とすには惜しい女だ。生意気だが、わたしは気に入った」

最後に僧侶が男と女に言いました。

「わたしたちは、あなたがたの将来を案じているのです。兄さんの言う通り、学校に泊まって二人で話し合いなさい。お互いの気持ちをよく知りなさい。一生の問題を勢いで決めては続かない」

言い終わると老三兄弟は立ち上がり、部屋を出た。開いたままの扉から、音楽が聞こえてきた。

---

残された男と女は、互いに顔を見合わせた。

「あなたにかばわれたまま、俺は何も言えなかった。俺さえしっかりしていれば、村でも、町でも、あなたを困らせることはなかった。あの人たちの言う通り、俺があなたを巻き込んでしまった」

「そのように言われては、恥ずかしくなります。怖い女だと嫌いにならないでください。わたしはただ、あなたが責められるのを見ていられなかったのです。あなたは悪くない。この町に田んぼはないのだから、働き口がなくても仕方ありません」

「俺は海に行きたい。村には戻りたくない。あなたはどう思う」

「生まれ育った村以外、わたしたちは何も知りません。村から近い町ですら、分からないことだらけです。でも、山のことなら少しは分かります。ここに来る途中、川原で休みました。わたしはあの川原で、あなたと二人きりで暮らしたい」

すると突然、教師が顔を出した。

「あの山は、この町の持ち物。勝手に住めば罪に問われる。口を慎みなさい」

教師は、部屋の外に出るよう、身ぶりで示した。二人が部屋を出ると、教師は男に耳打ちした。

「覚えておくといい。この部屋で扉を開けたまま話せば、家中に聞こえる仕掛けになっている。黙ってついて来なさい」

男と女は、教師に連れられ庭に出た。すでに、音楽は止んでいた。町の人々は、老三兄弟の周



りに集まり、祝いと別れの言葉を交わしていた。

男と女は、教師の背に隠れ、門から家の外に出た。すると後ろで、歓声が上がった。

「気づかれた。急いで」

教師は、女の手をつかみ走り出した。男は、女を見失わぬよう、重い手足を動かし、必死に追いかけた。

### 3 決断を迫られる男と女

---

教師は、女の手を引き、川下に走った。男は、二人を追った。町の人々は、三人を指さし、声を立てて笑った。

家並みは、川を下るほど小さくなった。学校は、一番川下に建っていた。門も庭もない、粗末な建物だった。

教師が、女を連れて学校に入った。男も追い付き、扉に手をかけた。すると男の顔に、鋭い光が差し込んだ。

男は、光の差す方へ顔を向けた。遠くの闇に、たき火の炎が見えた。人影の奥に、馬車が見えた。男は、たき火に向かって歩き出した。すると学校から教師が出てきた。

教師は、男を学校に入れ、川上に戻って行った。

---

女は、男に駆け寄り、ささやいた。

「今なら逃げられます。この町を離れましょう」

「町外れに馬車が止まっていた。俺が行って、乗せてくれるよう頼んでくる。あなたはここで待っていてください」

「いいえ、わたしも参ります」

「俺はあなたに助けられてばかりいる。今度は俺が何とかしたい」

「あなたはちっとも分かってくださらない。ほんのわずかな間ですら、あなたと離れて、わたしがどれほど心細かったか。門からここまで、どれほど長く感じたことか。これ以上、どうして一人で待っていられますでしょうか。わたしも行きます」

「俺が戻らぬと疑っているのか？」

「どうしてそのように悪くお取りになる。わたしはただ、見知らぬ土地で一人待つことが恐ろしいのです」

「しかし、馬車にいるのは、誰だか分からない。誰だか知れるまで、どうかここで待っていてほしい。必ず迎えに戻る」

「どうしても、わたしを連れて行ってはくれないのですか？」

「俺の思う通りにさせてほしい」

「分かりました。そこまでおっしゃるならあなたの言う通りにします」

男は、女を抱き寄せささやいた。

「俺が部屋を出たら、扉を閉めて。教師が戻っても入れてはいけない。俺は寝ていると言ってほしい」

「ええ、あなたが戻るまで、わたし一人で待ちます」

男は、女を残し、学校を離れた。

---

男は、たき火に向かって歩き出した。すると踊り子が姿を現した。踊り子は、男に言った。

「お前は馬車に乗りたいのだろう。あたしについてきな」

男は、踊り子に従った。踊り子は、男の腕を取り、川原に降りた。川は緩やかに流れていた。

「今夜、お前はあたしのもの」

踊り子は、男に身を寄せた。男は、身を引き、踊り子に問いかけた。

「馬車の話は本当ですか？」

「日の出前に、あたしらは町を出る。お前は一緒に来るといい。だけど、あの女は乗せない。この町に置いていく」

踊り子は、男にもたれかかった。男は、踊り子の体を受け止めきれず、地面に倒れた。

「俺一人では行けない」

「あの女のどこがいい。今のお前には、荷物でしかない。だけど、あたしは違う。踊りで稼げる。お前一人くらい、食べさせてやれる。馬車で寝かせてやれる。何の心配もいらない。お前はただ、あたしとくればいい」

「俺は、あの人と一緒に暮らすため、村から逃げて来た」

「だけどお前は、あの女が隣にいたのに、踊るあたしを見た。あたしに近づいた。忘れたのかい？」

男は、踊り子をはねのけることができなかった。踊り子は、男の手を取り、豊かな胸に押し当てた。男は、女の胸に顔を押し当て、静かに泣き始めた。

「あたしを目の前にしてなんだい」

踊り子は、男の背中を叩いた。男は、踊り子の胸で泣き続けた。踊り子は男の髪をなで、話しかけた。

「あたしには分かっている。だけど、泣いたって仕方がない。明日どこにいるか分からなくなつて、今はここにいる。それでいいじゃないか」

「俺は町に行けば、どうにかなると思っていて。何の当てもなく、ただ逃げて来た」

「お前がわたしとくれば、あの女にだって道が開ける。この町で教師の世話になればいい。簡単な話さ」

「だけど、それでは……」

「何のために二人で村を出たのか分からなくなるかい？」

「俺があの人を連れ出した」

「いいや、あの女も村を出たかっただけさ。村の暮らしに飽きたのさ。お前が気に病むことはない」

「違う。あの人は俺のために一緒に来てくれた」

「偶然が重なって、そんな風に見えるだけさ。誰でも納得できぬことはしない。あの女は、村を出ることを選んだ。そしてお前はあたしに、あの女は教師に出会った。村を出た時とは違う。町に着いて事情が変わった。決めたことに縛られ、心を偽るほど退屈なことはない。あの女に遠慮することはない。あたしを選びな」

「俺は、あの人が好きだ」

踊り子は、男の体を投げ出した。

「ぬけぬけとよく言ってくれる。もうお前はいらぬ。だけどいいかい。今のお前には、あの女と暮していく術がない。でも教師にはある。あたしがお前なら、自分が先に女を作って、女の心変わりを隠してやるね。よく考えな」

踊り子は、川原から去った。取り残された男は、ぼんやり川面を眺めた。

---

一人で待つ女のもとに、教師が戻ってきた。しかし女は、男との約束を守り、扉を開かなかった。女と教師は、扉を隔てて座り込み、相手の様子をうかがった。すると女の腹の虫が鳴った。

教師は、女に言った。

「二人分の食事と毛布を持ってきました。しかし、どうやら娘さん一人のご様子。あなたを残して、お連れはどこに行かれました。わたしが探してまいりましょう」

「いいえ、探す必要はありません。ここにおります。あの人は、疲れて眠っているのです。どうかこのまま寝かしておいてください。眠らせてくれるだけで十分です」

「しかし、そんなにお腹が鳴っては、あなたは眠れないでしょう。眠ったお連れには、毛布が必

要でしょう。この町の朝は冷え込みます。どうか、この扉を開けてください。わたしを信じてください」

「夜が明ける前に町を去ります。どうか、今は二人だけにさせてください」

「それは困りました。わたしは、この学校の教師です。この家で寝起きしています。あなたが扉を開けてくださらないないと、外で寝るより他ありません。どうか、入れてください」

女は、部屋の中を見回した。机と本が見えた。それから、部屋の隅に押しやられた布団を見た。

「この学校は、わたしが建てました。門も庭もない粗末な家ですが、初めて持ったわたしの家です」

「大切な家から、わたしはあなたを追い出しているのですね。けれど、どうしても中に入れるわけにはいきません」

「戻るまで誰も入れないと約束されたのですか。ならば、お連れが戻るまで、わたしは川原で待ちましょう。食べ物と毛布は入口に置いていきます。わたしが去った後で、温まって、食べるといい」

教師は、歩き出した。すると入口の扉が開いた。女は、教師に言った。

「ここはあなたの家です。わたしが外で待ちます。どうぞ入ってください」

「あなたは狙われている。外に出てはいけません」

教師は、女を押し戻し、建物の中へ入った。

「町には、悪い連中も出入りします。あなたが村を捨てたことは、町中の人間が知っています。後ろ盾のない若い娘を連れ去っても、誰も騒がない。捕まえて売り払おうと待ち構えている。いいですか、絶対に外に出てはいけません」

教師は、食べ物と毛布を置くと、外へ急いだ。女は、教師を引き止めた。

「待ってください。どうかわたしに、教えていただけないでしょうか」

「わたしに分かることなら、なんでも教えます。いったい何を知りたいのですか？」

「何もかも全部です。わたしは、生まれ育った村のことしか知らないのです。村の中でも、田んぼのことは何も知りません。どうか教えてください」

「字は書けますか？」

「はい、母に習いました」

「こちらに座ってください。食べながら聞くといい。さあ、毛布にくるまって」

教師は、女を座らせ、毛布で包んだ。そして、女の手には食べ物の包みを持たせた。

---

女が教師から学んでいたころ、男は川面を見つめ続けていた。

夜風に吹かれて、男の体は冷え切り、凍えた。いつしか半円の月が昇り、辺りを照らしていた。不意に魚が跳ねた。男も立ち上がり、土手を駆け上がった。

男は町を見た。人影の消えた町は、静まり返っていた。

男は海を探した。しかし、月明かりに照らされた川下には、畑が広がっていた。畑の奥には、森があった。海は、どこにも見えなかった。

男は、川下に向かって歩き出した。たき火の横を通ると、馬車から人影が現れた。

「お前が、わたしのかわいい娘を振った男だね。今ごろ来ても、娘はいないよ」

「俺は、あなたたちの暮らしに役立ちません。連れて行っても無駄です。海には、俺一人で行きます」

「一人だって、連れの女はどうした？」

踊り子の母は、男を見た。男はうつむき、何も答えなかった。

「教師にとられたのかい？」

「違います。でも、そうなった方がいい。俺といっても、あの人は幸せにはなれない」

「お前にだって、何か一つくらいは身につくだらう。そうすれば二人で幸せになれる。お前は何が好きなんだい？」

「宴であなたたちを見ました。音楽も、踊りも、見事でした。でも、俺にはどれもできません」

「お前はまだ若い。その上、ずっと同じ場所で暮らしてきた。できなくてもいい。何が好きなんだい？」

「何が好きなのか、俺には分かりません」

「お前は、あの女を好きになった。あの女との未来を望んだ。他には何を望むんだい。歌や踊りでなくてもいい。あの女の他に、何がほしい？」

「俺はただ、あの人と暮らせる場所がほしいだけです。村にはなかった。だから町へ来た。だけど町にもなかった。きっと海に行ってもない。この世のどこにもありはしない。望んではいけないことだった」

「お前は優しすぎる。だけど、わたしはお前が気に入った。お前の未来を占ってやろう。わたしは占いもやる。お前の心に語りかける。さあ、こっちへ来て温まりながら話そう」

踊り子の母は、消えかけたたき火に、枯れ枝を投げ入れた。たき火から赤い炎が立ちあがった。男は、揺らめく炎を見ながら、踊り子の母の言葉を聞いた。

「同じ場所に住んで、同じ暮らしを続ければ、だんだん知恵がつく。力がつく。知恵の多さ、力の強さで競いあい、命じあって支配が始まる。わたしらは、そんな暮らしに背を向け、馬車で旅をしている」

「うらやましい。俺もあなたたちのように誰からも縛られず、自由に暮らしたら」

「いいことばかりじゃないさ。どの土地にも習慣がある。それを知らぬわたしらは、よそから来た人間。大人のくせに知らぬものと、失敗しては笑われる。笑われてやる。自由には違いないが、何もかも心得た立派な人間にはなれない。生まれながらの道化者さ。誰からも必要とされない」

「だけど、宴ではみんなに求められる」

「宴の間は、昼と夜が入れ替わる。夜に生きるわたしらが主役さ。誰もが寄ってくる。だけど、朝になれば追い払われる。どこにもとどまれない。今のお前のようにね。お前は偉くなりたくはないのかい？」

「今朝までの俺は、同じ明日が続くと思っていました。だけど今、俺は知らない町にいる。明日のことも分からない」

「村に帰りたいかい？」

「いいえ、俺は帰りたくない。でもあの人を守るためには、帰った方がいいのかもしれませんが。たとえ、仲を引き裂かれても、飢え死にさせるよりいい」

踊り子の母は、たき火に枝を投げ込みました。すると炎が噴きあがり、火の粉をあげて消えました。それを見た踊り子の母は、男に言いました。

「川上へ続く道は、なんで途絶えた？」

「遠い国から、安くて、美しい宝石が入るようになって、山越えをするものがいなくなったそうです」

「お前の村で、今でも原石は取れるのかい？」

「取れます。でも、どんどん小さくなっています。だから、山辺の人たちは、小さい石を組み合わせて、新しい飾りを作り始めました」

「この町で、川上に用があるものはお前らだけだ。お前らしか道を必要としていない。だけど、お前が道を作れば、利用するものがあるだろう。それを仕事にしてはどうだろうか。お前に道が作れるかい？」

男は、山を見た。そして、踊り子の母に問いかけた。

「そんなことが、仕事になるでしょうか？」

「なるさ。山には、きのこや山菜、果物がある。季節になれば採りに入る。便利になって文句を

言うものはない」

「確かに、町の人たちも喜ぶかもしれませんが。でも、それがみんなに認められる商売になるのでしょうか？」

「お前が商売にもっていくのさ。町の代表と話をつけるといい。そうすれば町で暮らすための仕事ができる。村とのつながりも残せる。いいことだらけじゃないか」

「確かに、あの人と一緒ならやれるかもしれない。あの人は山に詳しい」

「それなら、帰ってあの女に話すといい。もう体は温まっただろう？」

「はい、ありがとうございます。あの人に話してみます」

男は立ち上がり、女の元へ駆けだした。

---

男が学校に近づくと、女の笑い声が聞こえた。男は、入口の扉に手をかけた。閉められているはずの扉は、簡単に開いた。

部屋の中には、女と教師がいた。女は、毛布に包まれ、教師と並んで座っていた。男は、女と教師の間に割り込み、引き離れた。男は、女に言いました。

「俺が戻るまで、誰も入れない約束だった。なぜこいつがいる。何を笑っていた」

「約束を破ったことは謝ります。でも、先生はわたしたちの味方です。この町のこと、海のこと、いろいろ教えていただきました。先が分かれば、旅が楽になります」

教師は、女に言いました。

「どうしても行かれるのか。あなたのように学ぶことが好きな方には、この町に残ってわたしの仕事を手伝ってもらいたい。きっとよい教師になる」

男が、教師に怒鳴りつけた。

「勝手なことを言うな。ここから出てけ」

女が、教師をかばった。そして、男に言った。

「先生は、ここで寝起きしていらっしゃるのです。出ていくのはわたしたちの方です。先生、ありがとうございました」

「こいつを先生と呼ぶな。いいや、呼べばいい。俺よりこいつと暮らせばいい」

「酷いことをおっしゃいます。村を捨ててあなたとこの町に来たわたしに、どうしてそんなことが言えるのでしょうか」



「違う。あなたは村を出たかっただけだ」

「急にどうしたのですか。ずいぶん長く戻られませんでした。何かあったのですか」

女が、男に触れた。男は、女を突き飛ばした。女は、床に倒れた。教師が駆け寄り、女を抱き起こした。

「酷い男だ。とても許せない」

「いいえ、この人は悪くない。わたしが約束を守らず中に入れたから、怒るのも仕方がない。だけど、あなたへのわたしの気持ちを疑われるのは耐えられない。どうぞ、わたしを信じてください」

男は、女に背を向けた。

「俺には分かっている。町へ来て事情が変わった。俺に遠慮はいらない。こいつと暮らせばいい。俺は一人で海へ行く」

「急になぜ？ どうすれば信じてくれるのでしょうか？」

「俺の前では、さっきみたいに笑ったことはない。何を信じればいい」

「わたしは、小さいころから変わった子だと言われました。誰もわたしの話を聞こうとはしませんでした。何を言っても笑われる。何をしても叱られる。だけどあなたは違いました。どんなに嬉しかったか分かりません」

男は、女を振り返った。女の中から、涙があふれていた。

「結ばれないことは、初めから分かっていました。好きになっても、別れが待っている。だから、あなたから逃げていたのです。だけど、わたしはあなたと話してしまった」

男は、女を抱き寄せた。女は、泣きながら、男の胸を叩き続けた。

「久しぶりに、一人で迎えた夕焼けは、恐ろしく寂しかった。思うことはただ一つ。川を下ればあなたがいる。気がつくとなわたしは、川に片足を踏み入れていました。そんなわたしを、あなたはこの町に連れてきてくれた。それなのに、今になって一人で行きたいなど、どうして言えるのですか。どうしてわたしに会いに来たのですか。一緒に暮らしたいと言ったのは嘘だったのですか」

「嘘ではない。俺が悪かった。許してくれ。だけど、あなたは村に帰った方がいい。あなたには海より山が似合う」

「わたしは帰りたくありません。あなたが海まで行くな、わたしも行きます」

「俺はどこにも行かない。この町であなたと暮らしたい。あなたに手伝ってほしい」

「どういう意味ですか？」

女は、泣き止み、男を見た。

「あなたと二人なら、山に入って、道を作れる。町の人たちにも役立つ。道作りを仕事にしようと思う」

「それはよい考えかもしれませんが」

教師が、男に言いました。男は、教師に頭を下げました。

「さっきは怒鳴って悪かった。許してほしい」

「気になさらずに。それより、詳しく話を聞かせてください」

男は、教師に打ち明けた。そして、頼んだ。

「あなたはこの町の人だ。どうか俺に、誰に話せば道を作らせてもらえるのか教えてください」

「山は、町長が世話しています。収穫時期も、収穫量も、すべて町長が中心になって決めます。町長に話すといい。そうだ、わたしが先に話してきます。あなたたちは少し休むといい。わたしは朝まで戻りません」

教師は川上に去った。

---

男と女は、二人きりになった。男は、女の手を取った。

「一人で行こうとしたこと、許してくれ」

「ええ、わたしを生涯愛してくれるなら、許して差し上げます」

男と女は抱き合い、深い眠りについた。

---

男が目を覚ますと、女は起きていた。男が起き上がると、老三兄弟が並んで座っていた。町長は満足げだった。商人は不機嫌だった。僧侶は穏やかに二人を見守っていた。最初に、町長が口を開いた。

「話は聞いた。山へ入ることを許してやってもよい。山に道を作ることを認めてもよい。だがしかし、問題が一つある」

商人が、口をはさんだ。

「単純だが避けられぬ切実な問題。あなたがたには費用がないということですか。道具も、住む家も、食べるものもない」

僧侶が、商人に語りかけた。

「ですから少しの間、この二人を信じて立て替えていただきたい。町一番の商人である兄さんにしかできません」

「やり遂げれば町の役に立つ。新しい商売につながるかもしれん。だが、成功の保証はない。口約束では信用できぬ。いくら弟の頼みでも、保証なしでは無理な相談」

町長が、僧侶に味方した。

「だが、昨夜の寝ぼけた若造とは思えんいい話だ。試す価値はある」

けれど、商人は承知しない。

「妙な前例は作りたくない。せめて、保証になる品があれば、悪用を防ぐ工夫になる。何でもいい。何か持っていないのか」

男と女は、顔を見合わせた。男は、首を横に振った。女は、川原で集めた石を入れる袋を出した。袋の口を開き、商人に言った。

「磨く前の原石ならあります」

「この町に、石を磨けるものはいない。原石では買い手がない」

しかし、袋から出てきたのは、原石だけではなかった。磨き抜かれた透明な石が入っていた。女は、村を出る前、母が石集めを手伝ってくれたことを思い出した。

商人は待ち切れず、女から宝石を奪い、光に当てた。朝日を浴びた宝石は、七色の光の帯を作り出した。老三兄弟は、美しさにため息をもらした。

「これほど立派な宝石なら、すぐに買い手がつく。わたしが世話しよう」

しかし、男が商人に言った。

「その宝石を売るわけにはいきません」

「お前はまた何を言い出す。売らずに、どうやって暮らすつもりだ」

「俺がやり遂げるまで、宝石はあなたに預けます。でもやり遂げたなら、返してもらいたい。そ

の宝石は、この人の宝物です。俺のために売らせたくありません」

「売り損なえばわたしが損をする。ええい、だがいいだろう。一年だ。一年の間、二人をわたしの宿に泊める。食事を出す。しかし一年でめどが立たぬようなら、この宝石はわたしがもらう。宿も出てもらう。これ以上は妥協せん。さあ、どうする？」

「一年あれば十分です。ただし、すぐに雪が降ります。冬の間、俺は宿を、この人は学校を手伝う。道を作るのは春からです」

言い終わると男は、老三兄弟を見回した。町長が、男に答えた。

「決まったな。ならば、町の人間に紹介せねばなるまい。わたしが二人を連れて、挨拶に回ろう」

「ありがとうございます」

男と女は、老三兄弟に頭を下げた。すると僧侶が女に言った。

「それでは、わたしは川上の村へ、二人の無事を知らせに参りましょう。道ができて、村に入れぬようでは困りますから」

「わたしの家は、山辺にあります。母に会ってもらえるでしょうか？」

「会って、あなたの代わりに謝ってきましょう。きっと許してくれますよ」

「どうか、よろしく願います」

話が終わると老三兄弟は部屋を出た。男と女も後に続いた。

男と女は、川下を見た。町外れに馬車の姿はなかった。川も、畑も、森も、朝日を浴びて輝いていた。

次に町を見た。朝日の下で見る町は明るく、昨夜の宴が夢のように思えた。

最後に村に続く山を見た。山は赤く染まり、炎のように燃えていた。秋の空は澄みわたり、明るく、青く、美しかった。

男は、女に言った。

「今日からあなたは、俺の妻だ」

「ええ、わたしはあなたと共に生きてます」

男は、女の手を取り、赤く燃える山に向かって歩き出した。

## あとがき

---

わたしは、自分が結婚するとは思っていませんでした。意外なことに結婚も離婚も経験することになりました。

正直、結婚している間は、親のまねをしようとしてやりきれずに自滅したり、どうしたいのかわからなかった。だから、結婚するとどうなるのか、どんな人と結婚したいのか、物語にすることで考えてみたかった。

体験談ではなし、古い時代の習慣に縛られた世界なので、目新しさはありません。でも、この話を書いたことで、自分が何に迷っているのか分かったような気がします。

学校には、「選択肢を増やす」という意味があります。結婚や就職には、「選択肢の中から一つを選ぶ」という意味があります。だから、できること、分かることが増えるほど、「やれるけど、やらない」が増える。でもわたしは、すべてを手放したくなかった。だから、行き詰ってしまった。

全部やろうとすれば、周囲の価値観に合わせることも、自分の希望を実現することも、あきらめなくてもすむ。でも、体力的にも、精神的にも、負担が大きすぎて体を壊してしまった。

一つに決めれば、誰もが認める理想からはかけ離れてしまいます。周りから、いろいろなことを言われるようになる。でも、将来を決めずに、何にでも通用することだけしていても、何者にもなれません。

多くの人は、就職活動中に気づくそうです。

結婚も、就職も、互いに希望を言い合うものです。だから、自分がどうしたいのかわからなければ決められない。

わたしは、採用されるかどうかを気にするだけで、自分に合っているのか考えなかった。だから、2年ぐらいでいやになってしまう。同じことの繰り返しで、目新しいことがなくなるから。

一番の問題は、自分が感じていることを無視して、合理的な判断に従おうとしていたことです。そうしなければいけないと思い込んでいた。だから、体を壊して、がんばりようがなくなった時、生きる気力を失ってしまった。

「人に親切にすることは、よいことです。良いことをするとうれしい」が動機なら、好きな人

にも、苦手な人にも、同じように接することができます。しかし、それは愛情とは違います。ただ、良い子でいたいだけです。

そんな具合に、個人的に思い出の多いお話です。

もし、少しでもわたしと同じ悩みを持っている人の役に立てたら、とてもうれしいです。